

『セルフヘルプの支援により QOL の向上が認められた事例』
～個人・環境因子の異なる在宅神経難病患者 2 症例の検討～

山谷 友範

株式会社 アール・ケア 訪問看護ステーションママック

【はじめに】今回在宅神経難病患者 2 症例を担当する機会を得た。2 症例は身体機能面においては類似しているが、疾患や将来に対しての考え方、屋内・外の活動に対しての意欲に大きな違いがあった。2 症例にお互いの生活状況、心境などについて話す場を設けることにより QOL の向上が認められたため報告する。

【対象・方法】症例 1（女性 50 歳代）：脊髄小脳変性症、「できる間に何でもやっておきたい」という前向きな考え方。症例 2（女性 60 歳代）：オリブ・橋・小脳萎縮症、「やってもどうせうまくいかないからやる気が起こらない」という後ろ向きな考え方。食事会の場を設定し、ご家族と共に参加を促した。自己紹介・連絡先の交換以外は自由に話す場とした。

【結果】実施前後の 2 症例の QOL 評価（SEIQoL-DW）において点数の向上、特に症例 2 の外出や交流に対する心情変化が認められた。その後も連絡を取り合い、相談し合う関係性を構築した。

【考察】身体機能の低下による不安感、あきらめにより出来ないという自己決定をしてしまう症例 2 は前向きな症例 1 と接することによりさらに自身を消極的にしてしまう可能性があったため、傾聴・共感による結論を出さないスタンスで関わりを持った。その結果、症例 2 は自己否定に陥ることなく思考を良い方向へ変化させることができた。身体機能面に向上が認められずとも QOL は変化する可能性があることを示唆することができた。